

### 冊子体 家族を探す遠い道のり : マリー・ン ディアイの『三人の強き女たち』を読む

元木, 淳子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

153

(終了ページ / End Page)

166

(発行年 / Year)

2011-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007749>

# 家族を探す遠い道のり

—— マリー・ンディアイの『三人の強き女たち』を読む ——

元 木 淳 子

## 1. はじめに

マリー・ンディアイ<sup>(1)</sup> Marie NDiaye の小説『三人の強き女たち』 *Trois Femmes puissantes*, Paris: Gallimard, 2009. (ゴンクール賞受賞作) の冒頭の場面にある感慨を覚えた。

1990年の小説『家族水入らず』<sup>(2)</sup>の冒頭では、祖母の家を訪れたヒロインが伯母に門前払いされる。小説『ロジー・カルプ』<sup>(3)</sup> (2001) (フェミナ賞受賞作) の冒頭では、ヒロインは兄を探してグアドループの空港に降り立つ。そして、『三人の強き女たち』でも、異国に暮らす父をヒロインが訪ねるところから物語が始まる。相変わることなく、マリー・ンディアイの主人公たちは家族探しの旅を続けているのだ。

マリー・ンディアイは、1967年、フランス中部の都市ピティヴィエに生まれた。父はセネガル人、母はフランス人だが、マリーが幼い頃両親は離別して、留学生だった父は帰国した。マリーは兄とともに、理科の教師だった母にフランスで育てられた。少女時代は、フランス人でありながら肌の色によって異邦人のように見なされる、自身の「異人性」 *étrangéité* に苦しんだという<sup>(4)</sup>。内気な少女にとって現実の世界はおそろしく、読書と空想の世界に生きた。文学によって救われたいと願って、十二歳から書き始めたという。

このような人物にとって、「家族」は必然のテーマだったのだろうか。1985年、高校生で作家としてデビューして以来、小説、戯曲、童話などで一貫して家族を主題として書き続けている。後に作家となるジャン＝イヴ・サンドリーと二十歳で結婚して、三人のこどもをもうけ、フランスのノルマンジーやジロンド地方で暮らした他、スペイン、イタリア、ドイツなどにも滞在している。

ところで、奇妙なことに、このように家族を描く作家であってみれば、読者としては、作家の実人生との関係から当然語られることを予想する「セネガル人の父親」については、ほとんど描かれてこなかった。また、作家の実存の苦しみの根底にある人種問題についても、戯曲『パパも食べなきゃならない』<sup>(5)</sup> (2003) が著されるまでは、正面から取り上げられることはなかった。それどころか、長い間、小説に黒人の登場人物が現れることさえなかったのだ。

デビュー作の『洋々たる未来について』<sup>(6)</sup> (1985) の主人公はフランスの青年である。その後のンディアイの登場人物たちは、髪や目の色が描写されて「白人」と特定されるか、もしくは、その外見が描写されず、人種も特定されないかのいずれかだった。たとえば、先述の『家族水入らず』では、ヒロインが母方の親族から忌み嫌われる。ヒロインの母がフランス人であることは示されるが、ヒロインとその父については、肌の色や外見的な特徴は一切記されない。

黒人の登場人物がはじめて現れるのは、2001年の『ロジー・カルプ』において、ヒロインを庇護するグアドループ人男性のラグランがそれである。実父がモデルだと作家自身が認める登場人物が現れたのは、『緑の自画像』<sup>(7)</sup> (2005) においてである。ただし、ここで「わたしの父」が暮らしているのは、ブルキナファソでセネガルではない。

2009年、『三人の強き女たち』ではじめて、「セネガルに暮らす父親」が現れる。父について、またアフリカについて語られたこの小説では、どのような家族探しが描かれているのだろうか。

## 2-1 『三人の強き女たち』とはどのような作品か

### 小説の構成

ンディアイの文学世界の「奇妙さ」*étrangeté*については批評家の一致するところである。カフカに傾倒するンディアイだが、カフカ的な謎や変身の要素はンディアイの作品にも認められる。特に初期の小説『薪に変身した女』<sup>(8)</sup> (1989) などにはカフカ的な不条理の気配が濃厚に漂う。「ポスターなどをごく近くで見ると、ただの小さな点の集まりになる。全体的な図案は消えて、目に映るものは、変てこな、不可思議で、理解不能なものになる。そんな奇妙な感じを書きとめた」とンディアイは2001年に語っている<sup>(9)</sup>。

『三人の強き女たち』も、冒頭から謎めいた雰囲気満ちている。語り手は第三者の立場で事態を語り、登場人物の過去が次第に明かされるが、謎が完全に解き明かされるわけではない。小説は3部に分かれ、各部それぞれに異なる女性の主人公が配される。

## 第1部 一人目のヒロイン：ノラ

冒頭一人の老人が、火炎樹の植わった大きな家の門口に佇んで、娘を出迎える。彼女はノラという三十八歳の弁護士で、父に請われて十五年ぶりに会いに来たのだ。逼塞した父の家では老いた従僕がひっそりと働いている。ノラはパリで働きながら、シングルマザーとして七歳の娘を育てている。ジャコブというオランダ人留学生と同棲しているが、彼にも連れ子がいて、事実上ノラがジャコブ親子も養う羽目になっている。彼に娘を預けて、ノラは父の国にやってきた。

ノラには一歳年上でアルコール中毒の姉と、三歳年下の弟のソニーがいる。ノラが八歳の時、父は偏愛する男児のソニーだけを連れて、美容師のフランス人の母を残して、突然帰国した。自分たち娘は不器量だったから父に捨てられたのだとノラは恨んでいる。帰国後、父は若い妻を娶り、双子の娘たちをえた。休暇村の事業を起こすなど羽振りのよかった時期もあり、ソニーをイギリスに留学させたりした。

だが、久しぶりに訪ねた父の家には、ソニーも後妻もいない。まだ幼い双子たちの面倒は、ハディ・デンバと名乗る十八歳の家事手伝いの娘がみている。父はノラに、ソニーがルブス刑務所にいるので弁護を引き受けてほしいという。インターネットでノラが調べると、弟に義母殺害の嫌疑がかかっている。

刑務所を訪ねたノラに、ソニーは、義母を殺した真犯人は父親で、自分は父の身代わりなのだと告げる。また、双子の娘たちは、実はソニーの子なのだという。ノラが事情をただすと、父はただ、老いた自分に刑務所暮らしはできないと答える。息子は許すが後妻は許さないとも語り、ソニーはすでに殺害を自供していると言いきえる。煩悶の末、ノラは弟を弁護しようと決意し、父親は安堵するのだった。

## 第2部 二人目のヒロイン：ファンタ

2部は、リュディという名の四十三歳の男が、激高のあまり、妻のファンタに

「もといたところへ帰れ」と怒鳴ってしまったことをひたすら後悔するシーンから始まる。妻との間にはジブリルという七歳の男の子がいる。リュディは数年来キッチンリフォームの会社に勤めている。仕事はへまばかりで、生活も楽ではない。

妻が家出しないかと心配したリュディは自宅に電話して、その日は自分が車で息子を学校に迎えに行き、一人暮らしの実母のところに預けてくると告げる。息子を人質にとろうという算段なのだ。

そもそもリュディが失言したのは、雇い主と妻が浮気をしているという密告があったせいなのだが、密告者が実母なのか近所の老婦人なのか、それすらリュディには判然としない。

リュディの父のアベルはバスク地方の出身で、かつてモーリタニアからセネガル川にいたってダラサラムに居を構えていた。リュディが八歳の時、アベルは、アフリカ人共同経営者で親友のサリフが、休暇村の事業に関して横領しているという夢を見て、覚醒後、彼を殺害した。アベルは刑務所に収監され、数週間後に獄中でピストル自殺を遂げる。

その後、遺族は帰国。リュディはボルドーの大学を卒業した後、ダカールの高校の文学教師となった。同僚のファンタと結婚して幸せに暮らしていたが、ある日、サリフ殺人事件を知る教え子から、「人殺しの息子」と罵られて逆上し、乱闘騒ぎとなる。ここでアベルが、1部のソニーと同じルブス刑務所にいたことが明かされて、読者ははじめて、1部の舞台がダカールであったことを知る。

この騒ぎがもとで失職したリュディは、故郷のジロンドにはファンタのために恵まれたポストがあるからと請け合って、妻子を連れて帰郷した。だが、妻に職は見つからなかった。ダカールでの仕事をあきらめさせ、親族から引き離して連れてきた妻に対して、今さら国に帰れと暴言を吐く資格はリュディにはないのだ。

学校に迎えにきたリュディを見るなり、息子は笑顔を失う。父子はうまく意思の疎通が図れないのだ。息子を連れてリュディが実母を訪ねると、老いた母は孫につれなく、近所の金髪の少年をモデルにして天使のデッサンをするのに余念がない。白人向けの宗教活動に挺身しているのだ。リュディが長年脳裏を離れない疑問——刑務所で誰が父に自殺用のピストルを渡したのか——を母に投げかけると、「サリフは親友である夫を裏切った。嫁は欲得づくで結婚した。向こうでは打算と金がすべてで、友情も愛も存在しない」と答える。これを聞いたリュディは、もう二度と母には会わず、今の仕事も辞めようと決意し、息子と一緒に

妻の待つ家に帰ろうと考える。

2部の最後は、窓越しに外を眺めている近所の老婦人に、ファンタがはじめての笑顔を見せ、手を挙げて挨拶を送るシーンで終わっている。

### 第3部 三人目のヒロイン：ハディ

ハディは、優しい青年に見初められて結婚し、あらゆる努力を払って子どもを授かろうとしたが、夢は叶わなかった。三年後に夫が病死すると、実家に身寄りのないハディは婚家にひきとられたが、次第に追い出される気配が濃くなっていく。ハディは貧しい中で祖母に育てられ、小さい頃から方々で家事手伝いをしてきた。今は姑小姑にいじめられながら、黙々と市場でバケツを売る毎日だ。ヒロインのフルネームはハディ・デンバという。ここで読者は、彼女が、1部でノラの父の家で双子を世話していた十八歳の娘と同一人物であろうことを知る。3部のハディは二十代後半とされているので、1部から3部の間に数年の時間が流れていることになる。

ある日、ハディの姑は、「一人息子が勝手に娶った気に入らぬ嫁をこれ以上養うわけにはいかない。おまえには白人と結婚してフランスにいるファンタという従姉がいるから、そこへ行け」と命じる。ここで読者は、2部のファンタと3部のハディのつながりを知る。

姑は幾ばくかの金をハディに持たせて、見知らぬ男に彼女を引き渡す。吐き気がするほど不安なハディだが、黙って男について行き、川の渡し場に導かれ、命じられた通り夜中に小舟に乗り込む。だが、舟が動き始めるや、突然川に飛び込んで岸に戻る。生まれてはじめて自分の意思でなした決断だった。

だがこの時、ふくらはぎに傷を負って倒れ、気がつくとならミーヌと名乗る若者に介抱されていた。何としてもヨーロッパに渡るつもりだというラミーヌは、ハディにも偽造パスポートを手配してやり、二人は密航するべくトラックに乗り込む。だが、途中検問の兵士に金品を奪われて、砂だらけの村に足止めされてしまう。

ハディは生き延びるために売春を余儀なくされ、いつかは終わると自分に言い聞かせて苦痛に耐える。何とか資金を工面して、二人で旅を続けようと考えていたハディだが、ある朝、ラミーヌは彼女の金を持ち逃げして行方知れずとなる。

一年後、ハディはやせ衰え、金も荷物もパスポートもなくして、森でテント生

活をしていた。密航に失敗した人たちの収容キャンプなのか、周囲には柵がめぐらされている。人々ははしごを用意して脱出に備え、ハディは物乞いをして飢えをしのいだ。

ある夜、キャンプのリーダーが柵を越えると宣言。ハディも森の中を移動して、みなとともに柵を乗り越えようとする。その時、背後から一斉射撃が始まり、ハディは銃弾に倒れる。地にくずれ落ちようとするその瞬間、ハディの目の前に一羽の鳥が現れる。自分がその鳥になったとハディは感じ、鳥もそれを理解したのだった。

3部の最後では、ラミーヌが、ヨーロッパのレストランで皿洗いをしながら、ハディに心の中で許しを乞うている。その頭上空高くで、かの鳥が舞っているのだった。

こうして読者は、1部と2部がダカールの刑務所を共通項として結びつき、2部と3部が、ファンタとハディの血縁関係で結ばれ、1部と3部が、ノラとハディの一瞬の出会いで結ばれていることを知る。三人のヒロインは互いにそれとは気づかずに緩やかに結びつき、輪舞をしているような印象を読者に与える。

## 2-2 三人の女たちはどのように「強い」のか。

小説のタイトルは『三人の強き女たち』だが、三人はそれぞれどのように「強い」*puissante*ののだろうか。1部ではシングルマザーのノラ、2部では移住して主婦となったファンタ、3部では家事手伝いのハディと、三人とも社会的には決して強い立場にはない。

また彼女たちは、自分の置かれた厳しい状況に対して言葉で対抗することもない。1部のノラは寡黙で、2部のファンタは電話口で夫に応答をする数語しか肉声を発しない。3部のハディにいたっては、内心のモノローグが記されるのみである。

これに対して、男性の登場人物は饒舌だ。彼らにとって言葉は、問題を隠蔽して人々の目を真実から背けさせるためにある。1部のノラの父は、自己弁護の理屈を並べたてる。2部のリュディは、妻に暴言を吐いた事実すら認めたがらず、心の中で延々と練り言を並べる。3部のラミーヌは、甘い言葉でハディを信用させたあげく金を奪って逃亡する。

このように、めくらましの言葉でごまかそうとする男たちに対して、女たちは、

社会的弱者の立場にあって、言葉での表出もなさぬながらも、男たちの抱える問題を根本的に解決する鍵を握っている。1部では、ソニーを守るのは弁護士で姉のノラである。2部では、精神的に破綻しかけているリュデイを妻のファンタが支え、家庭を守る。3部では、海を渡ったラミーヌを、ハディが鳥となって見守る。男性の登場人物に対して影響力があるという意味で、また問題解決の能力があるという意味において、彼女たちは「強い」のだ。

さらに、三人のヒロインたちを比べると、1部から3部へと物語が進むにつれて、その社会的な地位はどんどん落ちて行き、これに反比例するように、文学的形象としては、崇高さを増して高みへと昇ってゆく。1部の怒れる醜女のノラが、地を這うように活動するのに対して、2部の美女のファンタは、遠景に退いて静かに微笑している。そして、3部のハディでは、この世ならぬ霊力が与えられ、鳥に変身して飛翔するのだ。精神面でも、ノラの場合には、父に対する怒りや恨みといった否定的な感情が主として描かれる。これに対して、ファンタでは感情の起伏は描かれず、ハディでは、歓喜といった肯定的な感情が書き込まれている。逆境のきわみにあるハディが、どのようにして幸福でありうるのだろうか。

## 名前

道徳観や理性に束縛されない原初的な喜びの感情はどこから来るのか。この根源的な問いを、作家は『ロジー・カルプ』あたりから追求しはじめたように思われる。『ロジー・カルプ』では、望まない妊娠から生まれたこどもの養育に疲れ果てたヒロインが、こどもを炎天下に置き去りにして、その死を図り、重荷を下ろしたと感じて大きな解放感にひたる。歓喜のうちに子殺しをする母親の姿は、その残酷さのゆえに、当時批評界も言及をはばかったほどだった。

『三人の強き女たち』では、ハディにおいて原初的な喜びのありかが追求されている。ハディは、密航船から飛び降りたとき、「熱く、猛々しく、我を忘れるような」<sup>(10)</sup> 強烈な「喜び」joieを感じる。生まれてはじめて自分ひとりの意思で決断し、実行できたからだった。

ンディアイのヒロインたちは、その決定が非道徳的であろうと、客観的に誤りであろうと、人生において自ら選択し、実行するとき、満足と喜びを覚えるのだ。

さらに、ハディ・デンバが強い喜びを感じるのは、自分の名前を口にするときだ。婚家で誰からも話しかけられず、完全な孤独のうちにあっても、ハディ・デ

ンバとそとつづやけば、自分が、祖母と夫という二人の人物に愛された存在であることを確認できる。その時、自分がなにものによっても分割されず、他の誰によっても代替し得ない、かけがえのない存在であることを確信し、そのことに言いようのない喜びを感じるのだ。

総じて、ンディアイの主人公たちは、自分の名前に強いこだわりを示す。いうまでもなく、誕生時に与えられた名前は本人が決定したものではない。名前の持ち主は成長するにつれて、それが自分を示す呼称であると認識するのだ。ンディアイの小説において「名前」は、登場人物のアイデンティティーと絡む重要な要素として扱われる。

『家族水入らず』では、ヒロインはある日突然、一族から排斥されはじめる。名前さえ正しく呼ばれず、なぜか勝手に「ファニー」Fanny と呼ばれるようになる。当然ヒロインは抵抗を感じるが、一族に受け入れられたい一心でその呼称を受け入れ、ついには、幼友達から元の名で呼ばれることを拒むまでになる。また、『ロジー・カルプ』のヒロインの本名は「ローズ＝マリー」Rose-Marie だが、愛する兄に「ロジー」Rosie と呼ばれはじめて以来、ヒロインはその名を受け入れ、親に対してもロジーと呼ぶよう求める。

このように、ンディアイの小説の登場人物は、他者が自らに与える名前を、他者と自身の絆を示すものとして理解し、その名前を受け入れるか否かを決定する過程で、自身のアイデンティティーを築いていく。したがって、自分にふさわしい名前を求める登場人物の旅は、概して平坦なものではない。

ハディのように、自分の名前を愛し、名前との幸福な関係を幼い頃から築いている肯定的な人物像は、『三人の強き女たち』においてはじめて提出されたものだ。ハディは、国家でなく、民族でなく、身分でなく、個人として、その名前で充足している。すなわち、人は愛されて育ち、生きてきたという実感があるとき、自分に誇りを持つものとして描かれているのだ。

## 2-3 なぜ三人なのか。

従来のンディアイの作品では、一人の主人公を中心に物語が進行してきた。例外的なのは『緑の肖像』で、ここでは、緑づくめに装った魔的な力を持つ女たちが現れる。ただし、見方を変えれば、複数存在する女たちはすべて、「緑の女」

という一人の女性像に収斂されるといえる。

これに対して、『三人の強き女たち』では、ノラの他に、ファンタとハディという、これまで作家が語ってこなかったアフリカの女性たちがヒロインに加えられた。この小説の独自性はまさにこの点——作家が自身の存在について問うことと、アフリカ人女性への関心とが結びついていること——にある。

## 父

作家の分身に最も近いのは、1部のノラである。両親が離別した後、娘が離れて暮らす父親に会いに行くという場面は、『家族水入らず』や『緑の肖像』などでも描かれている。そこでは、父親に対する反感などは書き込まれず、父との交流は非常に抑制された筆致でたんと描かれていて、淡い思慕の情もこもっていると感ぜられる。

これに対して、『三人の強き女たち』では、ノラが、八歳の時に父に捨てられたトラウマを未だに抱えていると告白し、再会した父に強い調子で応対し、厳しい批判も容赦なくあびせる。父親に対する複雑な娘の気持ちが、これまでになく直裁に語られている。

## 人種問題

フランスに生まれ育ったンディアイは、当然ながらフランス文化への同化を果たしている。にもかかわらず、その肌の色によって、フランス社会ではつねに周辺に位置づけられる存在である。作家が、自分の国において異邦人と見なされる状況に苦しんできたことはすでに見た。そして、作家としてのンディアイは、その「異人性」ゆえに、読者から人種問題を語ることを期待される存在でもある。

だが、フランスの読者に向かって、分かりやすい言葉で人種問題を語り、「マイノリティーの作家」といったレッテルを貼られることをンディアイは戦略として拒否したのだろうか。あるいは、自身の経験を直接的に語ることがあまりにつらい作業であったからか。デビューから十六年間は、作品に黒人が登場することはなく、人種問題が正面切って取り上げられることもなかった。

他方で、作家は絶えず文体の革新を試み、その語り方を極めようとしてきた。『古典的な喜劇』<sup>(11)</sup> (1987) は、句点なしの、長い長い一文でできた実験的な小説である。『家族水入らず』 (1990) では、変身や謎に満ちた非日常と日常の世

界を混在させる手法を用いて、共同体や家族から執拗に排除される個人の姿が描かれた。ヒロインに人種的な印は付与されていないが、あえて読者がヒロインと作家を重ねて読むならば、小説は、作家が経験した「異人性」の日常をカフカ的な手法によって表現したものと解釈しうる。他方、ヒロインの人種が特定されないことによって、小説は、人種問題にのみ限定されない、いわば「普遍的な」いじめや嫉妬、差別の物語としても成立しているのだ。

だが、戯曲『パパも食べなきゃならない』（2003）あたりから作家の書き方に変化が現れる。ここでは、失踪して十年ぶりに家族の前に現れた黒人の父親に対して、こどもたちと白人の母は困惑し、母の親族や知人は、偏見をあらわにして、聞くにたえない人種差別的言辞を吐き出す。人種問題をテーマとしたこの戯曲は、国立劇団コメディイーフランセーズのレパートリーに加えられた。

同様の変化は童話作品にも現れる。ンディアイの童話は、『瞳の天国』<sup>(12)</sup>（2003）までは、登場人物の肌の色は特定されていない。だが、『のぞみ』<sup>(13)</sup>（2005）では、こどもが欲しかった白人の夫婦が、肌の色の黒い女の子を授かるという設定になっている。人種問題は描かれていないが、あえて少女の肌の色を特定したところに、作家の問題意識が示されている。

この変化は何によってもたらされたのだろうか。『緑の肖像』（2005）には、その理由の一端が見出されるように思われる。ここでの語り手は、アフリカ人を父に持つ、五人のこどもの母親である。こどもたちが学校で仲間はずれにされている現場を目撃し、自分自身のこども時代と重ねて、胸しめつけられる思いがする。このいじめが永遠に続きはしないことをこどもたちは理解できるだろうか、と心を痛めている語り手の姿には、我が子をも巻き込まずにはおかない人種問題に対する作家の危機感が感じられるのだ。

そして、2008年、マリー・ンディアイの兄で歴史学者のパプ・ンディアイが、フランス社会のマイノリティーとしての黒人問題を論じた『黒人の条件』<sup>(14)</sup>を著すと、マリーは序文を寄せ、忘れがたい「混血の」姉妹の姿を伝えた。それは、肌の色は白人に近い美人だが、白人でないことを気にして引きこもってしまう姉と、肌が黒く差別を蒙りながら、気にする風も見せず精力的に活動しているが、その実、心に深い傷を負っている妹の姿である。

『三人の強き女たち』では、人種問題は、地理的にはヨーロッパとアフリカの両大陸にわたり、歴史的には主人公たちの父親世代から今日に至る幅を与えられ

ている。

2部で、アフリカで一旗揚げようとしたリュディの父は、裏切ったアフリカ人（それが事実であったか否かは書き込まれていない）を殺害して、自殺する。リュディの母は、アフリカ人に不信感を抱いて帰国し、その後は、白人のための宗教活動に専心している。一方、リュディは、父の夢を継ぐべくアフリカに戻り、アフリカ人と家庭を築いて、理想はいったん実現されたかに見えた。だが、やがて父の犯した殺人事件がもとで、アフリカに居場所を失う。妻を説き伏せてともに帰郷したものの、夫婦にまともな仕事はなく、親族や近隣からくさびが打ち込まれて、夫婦は次第に追い詰められていく。

小説では、幾世代にもわたって、人種主義が個人と家庭を蝕んでいるさまが描かれているが、2部の最後で、リュディが人種主義に固まった母親と決別して、アフリカ人の妻と息子を守ろうとする態度には、一条の光が感じられる。

## アフリカ

フランスを中心にヨーロッパで暮らしてきた作家ンディアイにとって、アフリカ文化に通じることは断じて当然のことではない。「これまでアフリカで暮らしたこともなく、父のことも事実上知らず、どんなアフリカ文化も受け継いではいません」と1992年に語っている<sup>(15)</sup>。にもかかわらず、その出自によって、またその職業によって、ヨーロッパ社会でンディアイは「無条件に」アフリカ文化に通じていると見なされ、ヨーロッパとアフリカの文化の橋渡しであることを求められる存在である。

だが、そのように安易に、かつ無前提にアフリカ性を期待される存在であるからこそだろうか、あるいは、自らが熟知した世界をこそ描くという作家としての誠実さの表れか、作品にアフリカが取り上げられることはなかった。

だがそれは、作家が父の土地に無関心であることを意味しない。かつて作家は、父に会いにセネガルに赴いて強烈な異文化体験をしたが、その衝撃は不快でなく、むしろ喜ばしい質のものであったと語っている。また、自分がフランスとセネガルの両文化に通じていないのは残念なことだとも言う。たとえ作品の中でアフリカを描かなくとも、作家が長年にわたって父の土地について学び、観察してきたであろうことは想像に難くない。

一部ながらアフリカが舞台として登場するのは『緑の肖像』（2005）で、語り

手である「私」が、文学シンポジウムのためにブルキナファソに招かれて、当地に暮らす父を訪れるというシーンがさらりと描かれる。

『三人の強き女たち』ではじめて、アフリカが作品の舞台として全面に登場することになる。この小説で注目すべきは、作家の父のふるさとであるセネガルという国名が慎重に避けられている点である。場所の表記は、小さくは、ダカールといった都市名、大きくは、アフリカという大陸名に統一されている。このことは、作品がセネガルという枠組みに限定されて理解されたり、私小説として狭く解釈されることを拒む作家の意図を反映しているのだろうか。あるいは、個人を規定する国家や国籍、国境の不自由さや理不尽さを斥ける作家の態度表明なのだろうか。ンディアイの問題関心は、国境を越えてヨーロッパとアフリカへと広げられ、深められている。

作家にとって、たしかにアフリカは熟知した地ではない。だが、誕生の時から、父との関係において結ばれてきた運命の地である。とりわけ、家族について書き続けている作家であってみれば、父の故郷であるアフリカについて書くことは、やはり作家にとって必然であった。語ることを運命づけられた、だが実際に長くは暮らしたことの無い土地や人についてどのように語るのか。その課題に作家は『三人の強き女たち』で取り組んだといえる。

作家はこの小説で、アフリカ人を父に持つ自身の存在の意味を問い、父の姿をアフリカの地に置いて描くのみならず、家族のために移住するアフリカ人女性や、沈黙のうちにアフリカに生きる女性をヒロインとした。長年関心を抱いてきたであろうアフリカ人女性たちを、その心情にまで深く分け入って描き出しているのだ。

### 3. おわりに

ンディアイの作品は、献辞のないものがほとんどである。だが、『三人の強き女たち』は自身の三人のこどもたちに捧げられている。この小説は、作家からこどもたちへの贈物なのだ。

人種主義の社会に生きて、自分の国で異邦人であるという不条理の、ごく近くで見るポスターの点の集合のような「奇妙さ」を言語化することから、ンディアイの作家活動は始まった。そして、創作を通じて、作家は次第にポスターの全体的な図案＝人種主義社会の全貌、あるいはその先にあるアフリカとヨーロッパの

(あるべき) 姿をつかんでいったのではないだろうか。そして今や『三人の強き女たち』でその全体像を読者、とりわけ人種主義に苦しんでいる若い世代に示しているといえるだろう。

作家の主人公たちが自分の名前に強いこだわりを示すように、作家自身もペンネームにこだわりを示している。セネガルに多いンディアイの姓は、N'diayeと表記されるのが通例だが、作家はアポストロフを消し、nを大文字表記する<sup>(16)</sup>。ヨーロッパの出自を示すマリーという名。セネガル性の薄められたアフリカの出自を示し、かつ個性的なNDiayeという姓の表記。そのペンネームには、ヨーロッパとアフリカ双方に由来を持つ作家の誇りが示されている。「父」と「アフリカ」というテーマを直裁に言語化した『三人の強き女たち』によって、作家は真にそのペンネームにふさわしい姿を現したといえるだろう。ヨーロッパかアフリカかのどちらかを選ぶのではなく、作家個人は事実としてヨーロッパの社会に属しながら、他方、アフリカへの関心をも失うことのない存在として、また、そのことによって、いずれの文化、いずれの社会をも活性化しうるような存在として、作家は自らのアイデンティティーを確立したといえる。

ところで、ンディアイは、これまで時としてフランス語表現のアフリカ人女性作家に分類されることがあった<sup>(17)</sup>。たしかに、長いアフリカ経験を持たないフランス人であるという点において、この分類は不適切である。だが、『三人の強き女たち』を読むならば、やはり、ンディアイをアフリカ人女性作家と感じてしまうアフリカ性が、たしかにそこには存在する。アフリカの女性たちへの作家の強い関心が、『三人の強き女たち』を、アフリカ人女性作家の小説と「誤って」銘打たれるような作品に仕上げたといえよう。

「変身」はンディアイに親しいテーマだが、この小説では幕切れでヒロインのハディが鳥に変身する。一方、変身はアフリカの民話にも親しいモチーフなので、ハディは民話のヒロインにも昇華する。そしてまた、ヨーロッパの空で羽ばたき、読者に鮮烈な印象を残すその鳥は、想像力によって大陸を越え、アフリカの女性の心に寄り添い、あるいはヨーロッパの空の下で働く移民を見守る、作家マリー・ンディアイの変身した姿でもあるだろう。

## 註

- (1) セネガルなどで行われている発音に忠実であるためには、「ジャイ」と表記すべきだろうが、フランス社会での作家の呼ばれ方に従って「ンディアイ」との表記にした。
- (2) NDiaye, Marie, *En Famille*, Paris: Les Editions de Minuit, 1990.
- (3) NDiaye, Marie, *Rosie Carpe*, Paris: Les Editions de Minuit, 2001.
- (4) インタビュー記事：' Marie Ndiaye, L' «étrangéité» en question', in *Afrique Magazine*, N° 190, juillet 2001.
- (5) NDiaye, Marie, *Papa doit manger*, Paris: Les Editions de Minuit, 2003.
- (6) NDiaye, Marie, *Quant au riche Avenir*, Paris: Les Editions de Minuit, 1985.
- (7) NDiaye, Marie, *Autoportrait en Vert*, Paris: Folio, 2005.
- (8) NDiaye, Marie, *La Femme changée en Bûche*, Paris: Les Editions de Minuit, 1989.
- (9) 'Entretien avec Catherine Argand', in *Lire*, avril 2001.
- (10) NDiaye, Marie, *Trois Femmes puissantes*, Paris: Gallimard, 2009, p.282.
- (11) NDiaye, Marie, *Comédie classique*, Paris: Folio, 1987.
- (12) NDiaye, Marie, *Les Paradis de Prunelle*, Paris: Albin Michel, 2003.
- (13) NDiaye, Marie, *Le Souhait*, Paris: L'École des Loisirs, 2005.
- (14) Ndiaye, Pap, *La condition noire*, Paris: Folio, 2008.
- (15) Ormerid, Beverley et Volet, Jean-Marie, *Romancières africaines d'Expression française*, Paris: L'Harmattan, 1994, p.111
- (16) Rabaté, Dominique, *Marie NDiaye*, Paris: Editions Textuel, 2008, p.24.
- (17) たとえば、前掲書 *Romancières africaines d'Expression française* にンディアイは含まれている。